

第2 言語習得における 'input' の役割に関する研究

広島大学大学院 柳 善 和

0 はじめに

この研究は、第2言語習得過程における input の役割を論じながら、日本の中学校・高等学校での英語学習に対して考察を加えようとするものである。

1 言語習得過程における input

言語習得過程に関してここでは3つの段階を考えてみたい。まず最初の段階は、①周囲で話されている言語やその言語についての知識を得る段階で、その言語習得のために情報を集める段階であるともいえる。次に、②最初の段階であるともいえる。次に、②最初の段階で集めた情報を何らかの方法で処理する段階が来る。そして最後は、③その言語を使ってみる段階である。②から③に至る過程に焦点をあてた研究には、誤答分析や評価論がある。これに対して①から②に至る過程に焦点をあてた研究には、教授法の研究があるが、近年、第1言語(L1)習得の際に子供に話しかける母親の発話や第2言語(L2)習得の際に学習者に話しかける母国語話者の研究も行われている。この研究は①から②に至る過程に焦点をあてたものの1つである。

Bialystok(1978)は、L2習得で、①から②に至る過程に関して、'Explicit Linguistic Knowledge'(Explicit)と'Implicit Linguistic Knowledge'(Implicit)という区別をしている。彼女によると、Explicitは目標言語の文法・発音等についての抽象的な知識を指し、Implicitは、目標言語の、いわば直観的な知識を指す。L1習得の初期の段階で与えられるinputは、Implicitを形成すると考えられる。これに対して、L2習得では、両者のいずれがどの程度与えられるかは様々な場合がある。L2習得を論ずる際、両者のうちExplicitについては、教授法の研究の中でしばしば扱われてきたが、Implicitについては、L2習得に必要な量・内容はあまり論じられてきていない。この研究では、そのことを考える手掛りを得ていきたい。

2 言語習得の際の input の特徴

まず、Krashen(1981:47)はinputを"intake-type"のものと"exposure-type"のものの2つに分けている。彼は、"intake-type"のinputが学習者のcompetence形成に貢献するのに対して、"exposure-type"のinputは単に聞こえてくるというだけのもので、(例えば普通の中学生がFENの定時ニュースを聞く場合がこれに当たるであろう)competence形成には、直接は役に立たないとしている。このことから、言語習得の際に学習者が必要とするものは、"intake-type"のinputであると考えられるが、以下その特徴を述べていく。

L1習得の際に子供に話しかける母親等の発話が、成人同士が話すときのものとは異っているのは容易に気づくことである。村田(1981:198-199)はこの特徴を以下の6つにまとめている。

- ① おとなにさし向けられる発話よりも、はるかに単純である。
- ② おとなにさし向けられる発話よりも、はるかに文法にかなっている。
- ③ 高度に冗長な形式をとる。

- ④ 語、句や文全体を反復し、先行の発話をパラフレーズする。
- ⑤ 限定された文型を頻繁に、かつ反復利用する。
- ⑥ 子ども自身の言語水準によく適合している。

また話されている内容についても Snow (1977: 41) は、母親と子供の身のまわりのことに限定されるとしている。L2 学習者に対して L2 の母国語話者が話しかける場合にも類似の現象が起こることが報告されている。例えば、Freed (1980 :21) は、米国人が外国人に対して話しかける場合の発話は、米国人同士で話す場合よりも、文の形式が単純になり、話し相手の L2 の能力によってそれが変化することを報告し、さらに、学習者の言語能力が低い程、母親が子供に話しかける際に用いる発話に文の形式の点で接近していくと述べている。

このように、L1・L2 の学習者に対して話しかける際に、母国語話者が用いる言語は類似の特徴を持っており、それぞれ、‘baby talk’, ‘foreigner talk’ 等と呼ばれる。

これらの言語について重要なことは、その形式、意味内容の単純化に加えて、意志伝達のために用いられているということである。つまり、たとえその形式、意味内容の単純化が学習者の言語習得を促進しているとしても、それは意図的に行われているのではなく、意志伝達のために無意識に行われているのである。

3 成人の L2 習得

言語習得の行われる環境は大きく 2 つに分けることができる (Krashen 1981: 40) 。 ‘Informal’ なものと ‘formal’ なものである。 ‘Informal’ な環境とは、L1 習得の際のように、自然な状態で言語が習得されるものであるのに対して、 ‘formal’ な環境は言語習得が意図的・計画的に行なわれる場合を指す。成人の L2 習得は両者のいずれでも行われ得るが、成人は抽象的な概念を操作できること、さらに子供のように言語習得のみに専念することが時間的にも社会的にもできにくいことから、 ‘formal’ な環境で行なわれた方が効率がいいと考えられる。

教室で与えられる input には目標言語の文法・発音等についての母国語での説明と目標言語による発話の両者があり、前者が、Bialystok (1978) のいう Explicit を形成し、後者が Implicit を形成すると考えられる。後者の中心を成すものは教師による発話であり、baby talk や foreigner talk に対して、teacher-talk と呼ぶことができる。teacher-talk は授業の運営、生徒への指示や、教材の説明等に用いられることになる。同じ様に L2 習得の際に学習者に対して母国語話者が用いる foreigner talk と比べて、この teacher-talk は、Henzl (1979: 65) によると、簡略化は行われるが文法性を損う程度までにはならないと言われる。Krashen (1982: 64) は、L2 習得の際の teacher-talk を重視しており、語学教師は teacher-talk を学習者の言語レベルに合わせて変化させる能力を持たなくてはならないとしている。

4 考 察

次の表 1 は ‘S.K.’ という人が 4 つの言語を習得する際に、どのような input を与えられたかを

表 1

Target language	Teacher-talk	Interlanguage-talk	Foreigner-talk
German	+	+	+
French	+	+	+
Hebrew	+	+	+
Amharic	-	-	-

示したものである (Krashen 1981: 122)。

表の中の 'Interlanguage-talk' は L2 を習得している学習者同士が話す際に用いる言葉を指す。例えばこの学習者は、フランス語を習得する際、teacher-talk と interlanguage-talk に接し、foreigner talk には接していないことがわかる。

日本の中学校・高等学校での英語学習者に与えられている input をこの表 1 に沿って考えるとどうなるであろうか。日本の中・高校生が foreigner-talk に接する機会は、テレビ・ラジオで流れる英語程度であろうが、これらの英語は一方的に与えられるものである。学校外で英語の母国語話者と実際に話をする機を持つ中・高校生はまれであろうし、今後多少は増えるかもしれないが、それも限られたものであろう。次に、interlanguage-talk であるが、すべての生徒が同じ言語を母国語としている集団で、これが自然に出てくるとは考えられない。最後に、teacher talk については、英語の授業で教師が英語を話すのを聞いたことがないとか、英語の授業は訳読ばかりであるといった生徒の不満を耳にすることを考えると、teacher-talk が英語の授業で十分与えられていない可能性もある。つまり日本の中学校・高等学校の英語学習者はこれら 3 種の input のいずれも与えられていない可能性があることになる。

この 3 種の input のうち、最も容易に改善できるものは teacher-talk であろう。いわゆる教室英語と呼ばれるものである。teacher-talk の重要性については、例えば、米山 (1983:67) が、「英語学習には、生徒の現在の学力あるいは一歩進んだ程度の、理解できる英語に自然なコンテキストの中で豊富に接することが大切である」と述べ、このことは L1, L2 習得の input の条件と同様のものを教室での英語学習でも取り入れるべきだとするものである。また、教師が英語を積極的に用いることで生徒の英語学習に対する動機づけを高めることができると考えられる (土屋 1983:96)。

これまで述べてきたことから teacher-talk の重要性は否定することはできない。しかし、具体的にどのような teacher-talk をどの程度与えればいいのかという問題は解決されていない。また、teacher talk が学習者の英語習得を促進するメカニズムも解明されていない。例えば、高校 1 年生の英語学習者にとって、「自然なコンテキストの中で話される、現在の学力あるいは一歩進んだ程度の理解できる英語」とはどのような英語なのか、またそれをどのように与えたらよいかは、各教師の勤に頼っているのが現状であろう。この点が今後の課題である。

References

- Freed, B.F. (1980) "Talking to Foreigners Versus Talking to Children: Similarities and Differences," in Scarcella, R.C. and S.D. Krashen (eds.)
- Henzl, V. (1979) "Foreigner Talk in the Classroom," *IRAL* 17, 2, 159-167.
- Krashen, S.D. (1981) *Second Language Acquisition and Second Language Learning* Pergamon Press.
- _____ (1982) *Principles and Practice in Second Language Acquisition* Pergamon Press.
- Scarcella, R.C. and S.D. Krashen (eds.) (1980) *Research in Second Language Acquisition* Newbury House Publishers, Inc.
- Snow, C.E. (1977) "Mother's Speech Research: From Input to Interaction," in Snow, C.E. and C.A. Ferguson (eds.)
- _____ and Ferguson (eds.) (1977) *Talking to Children* Cambridge University Press.
- 土屋澄男 (1983) 『英語指導の基礎技術』大修館書店。
- 米山朝二 (1983) 「外国語指導法 — 現状と展望」『英語教育』 31, 14, 3月増刊号, 65-67.